

頭は跳ぶ足の方へ傾く

○射鎗馬を見て

十月二十八日明治神宮外苑で二日に行はれる對鎗馬の稽古の拜見を許されて出かけました日本歴史で教へる時もヤブサメと云ふ讀み方の難じさに囚へられて頭の悪い生徒は「人の名」ですと書くものもないではありませぬ故實を目のあたり見る嬉しさに今や遅しと待つてゐると何坪か繞らされた橢圓形の馬場の柵の右手の射棊アツテ(太鼓をうつ所)から紅の裝束つけた人が合圖の太鼓を鳴らすと左手の端から八騎の射手が各、前に三名の耶黨に角の木の的を持たせ裝束つけた的奉行を引連れ馬のくつわを下郎に取らせて狩衣姿で指貫の袴をはき馬上豊かに弓矢を携へて乗り出して來ました一順すると一度たまりに控えて先頭の一人は衣冠をつけた神主めいた人と馬場の中央で挨拶をし全體馬場を退きますその中愈々なる一聲の太鼓で出るよと思ふ間もなくはやる馬と共に勢ひ込んだ「イヨウアラ〜」のかけ聲勇しく黒白の幔幕張つた的場の前にたてられた白木の的をばつと射る拍子にパツと真中から二つに割れてとびますそのまゝ馬はかけつて乗手は腰より二の矢をとつて番へ第二の的場で又も射第三の的場で射て馬場の後へ退いて行きますひつそり靜つた見物人の前で暗の離れ業その昔屋島の戦に花を欺く平家の官女の扇を一矢で射おとした那須の興市の悌は見る由もありませぬが夕陽に輝く赤青の錦の衣風をきる矢の音馬の勢は暗れがましく又壯快の極みてした、恐らく頼朝の時分もさうでせうが近代人の射手は見物人の前でかなりなくれたとる人もありましたこれは又一つに馬にも弓にも昔程親しみの少い生活のせいでせう

(らく子)

尖を左方へ向く、此の時の歩法は左又は右方へ側進するので前進するのではない、尙初めて二回叩く時はつま先にてなし、それより軽くたぐりつゝ右側又は左側進を(前に述べたる如く)なす

(ハ)曲第五、六段 三歩目に兩手を開く時兩足の踵を充分に上げ頭は出したる足の方向下にさぐ、而して兩手を開く時じり〜と力強く柔かに側方にあぐ

(ニ)第二回目の曲第一、二段 右向行進兩手を側方に開きたる場合充分に兩手を後ろに胸を出すことに注意を要す

第三、に移る時急に左横足に變ずる所に氣持よき所あり、急速の變化を心持ちとすべく、膝の屈伸に注意すべし

終りの兩手を左右に開き膝の屈伸を行ふとき膝の屈したる時手を下に而して手をそらせる様に力を入れ膝の伸びたる時に軽く手をゆるめる、四段も同じ要領である

(ホ)だるま風にて跳躍する場合兩手は下より軽く組み胸部に影響の少なからしめんことを要す、